

久保 哲夫先生を偲んで

田尻 清太郎

●東京大学大学院工学系研究科 准教授

本会の会長（2010年6月～2011年5月）を務められた久保哲夫先生（東京大学名誉教授）が本年2月21日に76歳でご逝去されました。ここに謹んで久保先生のご冥福をお祈り申し上げます。

久保先生は東京大学入学後、1968～1969年の東大紛争の最中に学部時代を過ごされたことをよくお話しされていました。1971年に東京大学を卒業、1973年に同大学院修士課程を修了、博士課程へ進学されました。1975～1976年の1年間、カリフォルニア大学バークレー校地震工学研究所の研究助手を務められ、1977年に博士課程を修了、工学博士の学位を取得されました。その後、東京大学工学部助手を2年間務められた後、1979年から建設省建築研究所（第3研究部／国際地震工学部）研究員、主任研究員を務められました。1983年に名古屋工業大学工学部助教授として着任、1993年に教授に昇任されました。その傍ら、1998～2004年の間、理化学研究所（のち防災科学技術研究所）地震防災フロンティア研究センターチームリーダーを務められました。2003年に東京大学大学院工学系研究科教授として着任され、2012年のご退職まで教育研究活動に携わられました。その後は、（一財）日本建築防災協会耐震改修支援センター センター長、（一財）日本建築センター建築技術研究所 所長などを本年まで務められました。この他、文科省地震調査委員会強震動評価部会委員、国交省社会資本整備審議会委員・同建築分科会会長なども務められました。

久保先生は建築構造学分野において、主として強震動特性の評価や鉄筋コンクリート構造の耐震構造工学について、幅広く研究、教育に携わられました。

強震動特性評価に関しては、カリフォルニア大学バークレー校のJ. Penzien教授の指導を受け、地震動の主軸方向とその特性に着目した三次元地震動の模擬モデルの作成手法を提案されました。また、強震動波形の位相が有する情報は何かとの疑問を端緒に研究を進められ、位相特性が時間軸に沿う地震動の強度分布に与える影響を明らかにされました。さらに、強震動記録に認められる周波数成分の非定常性に着目し、それが建物の地震時の弾塑性応答を成長させる機構の解明に努められるなど、地震動特性から建築物の地震時挙動まで幅広く研究成果を挙げられました。

鉄筋コンクリート構造の耐震構造工学の分野では、連層耐震壁架構の弾塑性応答、2方向地震入力時の建物の弾塑性応答、降伏機構保証設計、履歴消費エネルギーと応答の関係などの研究に取り組み、我が国の鉄筋コンクリート造建物の耐震設計の向上に大きく貢献されています。

また、1995年阪神・淡路大震災を機に設置された地震防災フロンティア研究センターにおいて、都市構造物の地震時破壊機構と都市の脆弱性評価に関する研究チームのリーダーを担い、地震の発生、地盤における波動の伝播と増幅、地盤から構造物への地震動入力、入力地震動に対する構造物の応答を一貫して捉えた、地震に対する都市構造物の脆弱性評価手法の開発に成果を挙げられました。

原子力発電施設の耐震設計の発展および安全性確保のための技術指針等の作成にも尽力され、日本電気協会の耐震設計分科会 会長なども歴任されました。

大学を退職された後も、ご逝去される直前まで、（一財）日本建築防災協会耐震改修支援センター センター長、（一財）日本建築センター建築技術研究所 所長などの要職を務められ、我が国の建築物の地震防災に大きな貢献を果たされました。

筆者が久保先生に初めてお会いしたのは、先生が東京大学に着任された2003年でした。私は在学中で、それ以来、現在に至るまで多大なご指導を賜るとともに、いつも気に掛けていただきました。つい昨年末まで先生の委員会で毎月ご一緒させていただき、先生の精力的なお姿を目の当たりにしていただけに、突然の訃報にただ驚き悲しむとともに、ご活躍中のご逝去まことに残念でなりません。いまはただ、心からご冥福をお祈りいたします。



東京大学在職時（2006.3）